

『焼肉』 作…ポチ子

女1 「人の金で焼き肉が食いたい。」

女2 「わかる。」

女1 「人の金で食べる焼き肉の味って格別だよね。」

女2 「わかる。」

女1 「この目の前にある肉たちが、1枚何円だろう。なんて考えずに食べられたら、どんなに幸せだろうか・・・。」

女2 「悲しい事いわないでよ。人の金でご飯が食べられるなんて、子供の時だけなんだから。」

女1 「まあ、人の金で焼き肉を食べられる幸運が現れたとしても、せっかくだから肉をたっぷり食べようと思うのに、結局ご飯を頼んじゃって、負けた気分になるのよね。」

女2 「どうして焼肉を食べると、自動的にご飯も求めてしまうんだろう。美味しい肉のために用意された胃の残量が、200円程度のご飯に圧迫されるのって屈辱よね。」

女1 「そう分かりながらも、結局頼んでしまう。これが人間の業ってやつね。」

女2 「はあ。今日から、ダイエットしようとしたのになー。」

女1 「大丈夫よ、肉は太らないっていうじゃん。なんでなのかは全

く分からないけどね。私、心の底からこの説を信じてるから。」

女2 「私も信者になろうかな。めっちゃご飯食べてるけど。」

女1 「肉に檸檬かけてるから、檸檬が中和してくれて、実質カロリー

ーゼロになるんじゃない？」

女2 「その説、採用。」

間

女1 「・・・こんな事言ってるから、一生痩せられないのね、私たち。」

女2 「現実見せないでよ。全力で目そらそうとしてるんだから。大体、こんな真昼間から、女2人が焼肉屋で、生ビール飲みながら、大量の肉食べてる時点でお察しだわ。」

女1 「それも、そうね。」

女2 「ああ、でも、美味しい。幸せー。」

女1 「ホントに。生きててよかったー。」

女2 「肉にビール、これ以上の幸せはないわ！私たち、今、世界で一番幸せな自信ある。」

女1 「はあー生ビールもう一杯飲もうかな。肉は？」

女2 「カルビとセセリとホルモン」

『焼肉』 作：ポチ子

女1 「野菜は？」

女2 「そんなもん邪道よ。」

女1 「同意。店員さん、すみませーん。」

— 終わり —